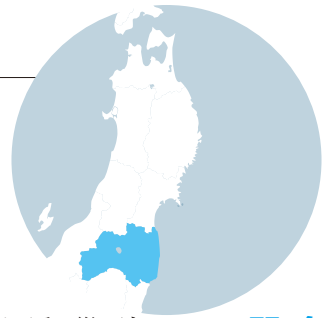




店舗を開け、商品を被災者へ 可能な形で、できるだけ早く!

コープふくしま各店舗・震災対策本部

震災はコープふくしまの11店舗にも深い傷跡を残した。周辺のスーパーは軒並み一時閉店したが、**同生協では「今できる形での営業」を模索し続けた。**原発事故も絡み、先行きは不透明ながら「ここで生きていく」ことを選んだ人びとの頑張りは、復興への活力を生んでいる。

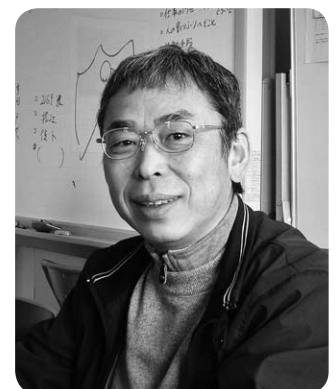


**全11店舗が被災するも
即日、非常用物資の提供を開始**

コープふくしまの運営する11店舗は、津波被害に遭わない場所にあったが、震災で大きな痛手を負った。特に、コープマート保原（伊達市）、笹谷（福島市）、国見（国見町）の3店は天井が大きく落ちるなどの甚大な被害を受けた。震災当日の対応は、各店舗が状況を見て判断した。建物などの程度ダメージを負っているか分からず危険なため、店頭で非常用物資を無料提供。または大幅に値引きしての販売を行なった。店舗によつては夜10時くらいまで物資の提供を続けたところもあったという。

コープふくしまの震災対策本部では、被災翌日（12日）の朝から各店の被害、ライフラインの回復状況の確認を進め、徐々に店頭販売から店内販売（通常営業）へとステップを踏み、復旧を図っていく計画を立てた。被害確認が進むに従い、前述の3店舗以外にもボイラーの破損や水道、浄化槽が使えない店が多数あり、無傷の店舗は皆無であることが分かった。どの店も対策本部と連携して応急処置を講じ、折り合いをつけながら事業継続を図った。

コープマートあだたら、桑折、やのめ、ほうきだ方木田などの店は震災の週内に、コープマート新町、いずみは震災後10日以内に、



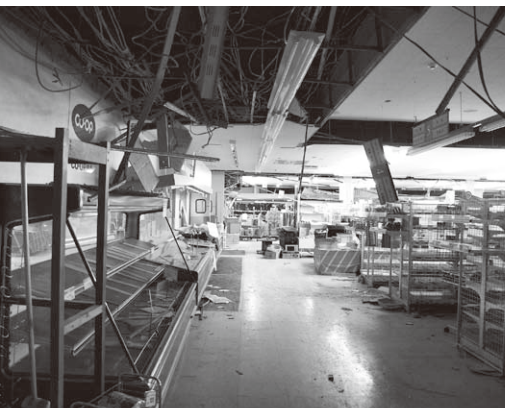
専務理事 野中俊吉さん

コープマート梁川、瀬上も翌週のうちに通常営業にこぎ着けた。通常営業を再開するまでの間は、いずれの店舗でもほぼ毎日店頭販売を続けた。ライフラインが途絶え、周辺のスーパーは震災後数日にわたり閉店していた。だが、コープふくしまは「今できる形」で地域を支えようとした。

さらに、燃料不足も深刻だった。「パート職員から、『ガソリンが手に入らず、店に行けない』との連絡があった。今は営業が15時までだから（3月21日時点）回せているが、営業時間を延ばすとシフトが組めなくなる恐れがある」「ガソリンが切れたら、店舗に泊まり込んで作業しなければならぬ」。そんな言葉が、各店から対策本部に上がってきたという。

地域の復興に向けて 奮闘するスタッフたち

21、22日に、コープマート瀬上・保原・



コープmart国見では、店内の天井が落ち、配線もむき出しに。



コープmart保原では、軒下の天井が落下。コープふくしまで最も大きな被害を受けた店舗のひとつ。

国見などで店頭販売に立ち会った。この状況下では、当然、売るほうも、買うほうも不慣れな形式で不便も多い。しかし、少しでも快適に、トラブルを起こさないための工夫を凝らしていた。会計時のトラブルを防ぐと値段を商品やそばの段ボールに大きく書き込み、1人が買える量を制限する商品についてはしっかり明記した。売場に並ぶ列の混乱を

防ぐため最後尾を示す目印を用意したり、ガソリン不足のため自転車で購入物にきた人が荷台に乗せられるサイズの段ボール箱も数多く準備した。

震災後は誰もが平常心ではいられない。何がきっかけで気持ちの行き違いが起ころるか分からないものだ。そんな中でも安心して買物ができるよう全員が配慮して動いていた。マニュアルなどないのだから、それぞれが状況を判断し最善を尽くしたのだ。

「電気は来ていますが、レジはまだ完全に復旧していません。だから、まだレシートを打ち出せるだけの大きな計算機のようなものですが、自分が商売を始めたころはこれが当たり前でした。そのころのことを思えば」と、ある店長が話してくれた。苦労を苦労と言わず、「非常時の今、すべきこと」をこなしていく。その姿は使命感に満ちていた。



コープmart笹谷では店舗裏のアスファルトが陥没した。

市内をひと回りして感じたが、震災後、街中でどこよりも多くの人が集うのが生活物資を販売する店舗だった。そこに集う人にとって、店舗は物資を得るといふ目的を超え、日常を取り戻し、復興に向けて立ち上がるためのエネルギーを充填する場として機能しているように見えた。店舗が被災した状況にも下を向かず、いつも以上に明るく商品を販売し続けるスタッフたちの存在は、訪れる多くの人びとを勇気づけていたはずだ。

〇〇で生きていく、 そう腹を決めた

震災から10日がたった3月21日。コープmartいずみ（福島市森倉）2階、コープふくしま本部事業所に設けられた「震災対策本部」で1日2回（9時と15時）行なわれている対策会議の最後に、コープふくしま専務理事の野中俊吉の なかしゅんきちさんは、

「皆さんの代わりはいない。まず自分の健康に気を付けるよう、伝えてください」と言つて締めた。

切迫した状況を目の前にして走り続けた職員、地震の直後から駆け付けていた支援者の疲労はピークにあった。だが、相変わらず余震は続き、事業エリアにある福島第一原子力発電所の動



店頭販売に備え、商品に直接値段を書き込み(上)、精算は電卓を使って行なった(国見店)。

向も依然として不透明だ。野中専務の言葉は、〇長期戦〇を視野に入れ、粘り強く復旧に挑む覚悟にも映った。

「先は見えない。でも、自分たちはここで生きていくしかない。そう腹を決めたらね、冷静になれて元気出していきましょう。気持ちが湧いてきたんです」（野中専務）。福島の人びとは前を向いて歩み出している。

（文・写真 秋山健二郎）

みやぎ生協

いわて生協

コープふくしま

コープネット